

平成27年1月5日発行(毎月5日1回発行)
第55巻1月号(通巻666号)

風土



筆休

神蔵器

牡丹焚く牡丹のほかは交へずに

おくれしか三尺とんで冬の蝶

筆休流星丈を余しけり

桂郎に葱鉄砲をふい打ちす

これやこの「鬼手仏心」や石露の咲く

冬 薔 薇 二 つ 咲 き て も 相 寄 ら ず
獵 銃 音 一 つ と ど ろ き 村 眠 る
蛇 穴 に 入 る 住 職 の 玉 手 箱
墓 抱 い て 約 束 は ま だ 笹 子 鳴 く
手 に と ど く 八 十 八 歳 八 つ 手 咲 く
ひ ひ ら ぎ は 母 の 泪 を 知 っ て を り
水 釣 っ て 煤 逃 げ し た る 昔 あ り



竹間集

同人作品



赤きセーター

浜 福恵

胡麻打つや日本海の青を背に
海へ出る脇道多し種瓢
火を囲む夕餉や酸橘匂ひ立つ
暴風予報そこにゐたのかきりぎりす
こころ挫けさうな夜もあり葛湯吹く
師にま見ゆ後より秋の足早に
赤きセーター師は健やかに在すなり

木の実降る

門伝 史会

木の実降る宇宙開発研究所
野分あと藍の雫の夜空かな
新米を研ぐ手やさしくなりてをり
灯火親し母の口ぐせ子が真似て
手の皺の母に似て来し敬老日
秋深し郵便受けに置き手紙
積み上ぐる俳誌の嵩や雁渡る

〔風土〕創刊五十五周年

「老樹」以後(九)

野沢しの武

母を憎み母を愛しし修司の忌
はらから亡く老妻も逝き夏ふたたび
木葉木菟の木彫が鳴けりたしか鳴けり
近き雷一瞬暗くなりし空
筆圧は誠意の証花菜咲くと
つづく低温田植進捗一%
小満や遅れてゐたる田植急ぐ

蚯蚓鳴く

鈴木 石花

曇り無き栗名月や友の通夜
一抱へ矢筈薄の盛り上り
蚯蚓鳴く半切和紙に自選の句
留守の庭俄に柚子の数増せり
峠越え刈田の先に高速道
落つ木の実延命坂に拾ひけり
秋麗や菩提寺五重相伝会

神無月

岩木 茂

なみなみと蕎麦湯を注ぐ神無月
花散りし萩のうねりも野分前
日を承けて折り目を正す濃竜胆
スコップの刺さりて誰も居ぬ刈田
真直ぐなマララの瞳秋澄めり
ふゆのはなわらびゆつくり近づき来
掌に声を集めてふゆのはなわらび

源義忌

相沢有理子

はららごの朱を添へし盆枕辺に
犬ねむる日溜まり谷戸の柿すだれ
爽涼の馬車道や馬ゆつくりと
ハイカラさん乗せて蹄の音さやか
月掬ふとび色の瞳のひたぶるに
秋闌くる入江や汐木焚くふたり
新酒注ぎ受けし優しさ源義忌

鴟高音

小林 輝子

小半日山の影負ふ栗筵
ゴム長の少女と犬と花野に影
日に風にいやされてゐる糸のこ草
風にいる奪はれてゆく座頭えび
篠懸の幹そそけ立つ冬隣
白樺に影なかりけり鴟高音
仰臥して横臥して夜の長きかな

女正月

橋添やよひ

比良の水引きて小春の小野の郷
しぐるるや棟に五三の桐の紋
風音のかたこと神の旅支度
振り向けるたびに近江の冬深む
比良見ゆる和邇街道や大根干す
初冬やあふみに餅の祖を祀り
手焙りの織部にかざす手のいろ
本尊は閻魔大王冬至梅
松の内四百年のもろみ樽
大津絵の鬼の三味線女正月

山河集

同人作品



神蔵
器選

ピカソ絵のブルー一色秋の声

祖山しやう正子

「加賀宝生」降りくみ声の松手入
すべらかしの皇女迎ふる神有月
木守柿の朱を深くして葉擦れ音
人迎ふやうにマネキン案山子かな

生田恵美子

一日の終はりの袖のぬのこづち
穴惑先行く人の振り向かず
山粧ふ最高峰が雲を吐き
どんぐりを踏まねば亡母に近寄れず
鶏頭の才槌頭子規の佇つ

内藤 静

鳥渡る寺の寄進に名を連ね
ほとけにも上中下品薄紅葉
大寺に椋鳥の寄る大樹あり

トンネルを七つぬければ紅葉濃し
船腹にロシア文字あり霧に入る

土井ゆう子

朝寒の鏡に声を出してみ
菊脛しづかに齡かさねけり
林檎剥くたび岩木山見えてくる
レーニン広場隅に鶏頭燃えてをり
ロシア正教会教会ドアに赤蜻蛉

岡本 尚子

父母の墓訪ひて十月桜かな
紅葉且つ散る通天橋臥雲橋
秋寂ぶや堂に定家の念持仏

義仲寺 二句

蕉翁の杖つやつやと雁渡る
無名庵に茶菓の置かれて松手入

鷹一つ

間島あきら

文字 大き 賢治の手帳 竜の玉
日を容れて 水の燃え立つ 霜の朝
啓蟄の空より 垂るる 綱の先
芽柳の空動かして をりにけり
道元の一行 三昧木の芽味 噌
密教に 地水火風 空椿餅
原発へ 二十七 籽えごの花
これやこの木遣りの街や 燕の子



開削は小名木四郎兵衛夏燕
水底を夏日の歩む隅田川
海一つ平らかに置く土用入
ユトリ口の孤独黒薔薇咲きにけり
迎へ火の朝の灰の白さかな
ほの白きものの一つに鳩のこゑ
フアックスに日付を入るる厄日かな
鷹一つ落とす上毛平野かな
鳥辺野を秋の時雨と歩きけり
木枯らしの切先もてる火の匂ひ
定家選の百首詠はむ冬の虫
片時雨西行定家のころかな

新人賞作品

まだ途上かな

榎野あさ子

利休忌の花定まりてしづかなり
亡^ま夫あらば年ごと花の弘川寺
京の花の殿つとむ御室かな
草萌える鎌倉七口化粧坂
京の路地軒寄せあつて春日待つ
春浅きトールソーに魅せられて奈良
聖五月人生はまだ途上かな
みちのくは地平線まで青田なり



どこまでもどこまでも青ぶだう畑
一歩づつ花の階杖ついで
初夏の風回転ドアと一回り
合掌の手を解くごとく蓮開く
富士山も名もなき山も秋の色
秋惜しむ白湯のさめゆく如くにて
抱一の秋草のごと月を待つ
深草の恋物語実むらさき
短日の昏ゆく先の石畳
さびしさをほどきてくれる柚湯かな
ほころびぬ白梅二輪道明寺
江ノ電のころがしてゆく梅の実を

新人賞作品

初明り

岡本尚子

雨乞ひの水に浸さる獅子頭
初秋やキスひとつして投函す
明日あると挟む栞や夜半の秋
「船折の瀬戸」の潮目や鰯干す
木の実降る京に会津の志士の墓
西を向く千体観音秋夕焼
始発駅に靴の洗ひ場零余子飯
三輪山に情なき雲神の留守



伝ひ来るレールの響き初明り
大寒や羽ばたかず鷹渡りゆく
大寒の糸もて轆轤の土を切る
千本の鳥居くぐりて春近し
幾つかに名前を変へて春の川
甲斐駒に白き残りて桃の花
水ぬるむ淡海に漏刻復元図
業平の塩焼く跡や下萌ゆる
天井川多き淡海や蛭舟
父愛でし蛭の川へ散骨す
京一步外れば幽谷朴の花
昼顔や妻でも母でも無き時間

◇特別作品◇(抄)

摩崖仏

下山田美江

神無月神木槨に目礼す
塩嘗地藏詣でぬ冬の切通し
切通しの入口二つ石路咲けり
鑿跡の切岸凍むや石仏
霜どけの馬の背越ゆる峠かな
切岸の高み落ちくる紅葉かな
花八つ手はるかに拝す摩崖仏
太刀洗水笥をはづる烏瓜
立礼の英文韓文蓼紅葉
切通しの一本道や冬雀

風土独語／神蔵器



「加賀宝生」降りくる声の松手下

祖山 正子

「加賀宝生」は、謡曲の歌詞を曲にしたもので、特に加賀の城下でさかんにもてはやされたものを言うようである。勿論、同好の人々が集まり謡曲を謡う会とか、謡曲稽古の集まりなどがあつたりするが、特に誰に習うというのではなく、自ら好み、声に自信もあつて謡の境地に没入した一般の人々も多いようだ。

このたびの句は、おそろくご自宅での作か、しかるべきお屋敷の所見であろう。秋もようやく深まった頃、庭師を入れて、年に一度の庭園の手入れをしている。ことに松の手入れは専門家でもむずかしくて、いったん梯子を下りて、煙草に火をつけ、ゆつくりと松を見たりして、そのあたりを見きわめている。人の眼にはいかにも休んでいるように見えるが、庭師にとっては一番の勝負どころである。

日は西に傾き、最後の最も大事な松の葉のすぐりや手入れも、ことごとく済んで、庭師はいまゆつくりと松から梯子へと降りつつある。はらばらと落ちてくるのは摘みとった松の葉ではなく、そろそろ遠く光りを得て来た夕星でもない。低いが澄んだ美しい声、それこそ、年期の入った加賀宝生の謡ではないか。

どんぐりを踏まねば亡母に近寄れず

生田恵美子

「どんぐりを踏まねば」と「亡母に近寄れず」は、お互いの年齢によつて微妙に変化があるようだ。亡くなられた時のお母さんの年齢にもよるが、一般的には若い時に母を亡くせば、子は一途に母をしたい、子が成長すれば母の死にも冷静に受け入れる。ところが自分が亡くなったお母さんと同じくらしいの年頃になると、亡き母はなつかしく親しみを持つようになる。

作者は今日、お母さんが亡くなられた年齢に近くなつたのではなからうか。わずかといえど、どんぐりを踏みつけてお母さんの墓参りは出来ない。幼い日のごとく、どんぐりをお母さんといつしよに拾つて墓前にお供えた。

林檎剥くたび岩木山見えてくる

土井ゆう子

岩木山・岩木川は津軽の父と母という。岩木山は海拔一六二五メートル。津軽の人々の信仰の山であるが、岩木川の流域とともに青森の中でも林檎の山地として名高い。

ところで、八戸から岩木山は見えるであろうか。東西に離れているといつても同じ青森県内で平地の直線距離にすればそれほど遠くはない。しかし、ど真ん中を奥羽山脈が走り、八甲田山・赤倉岳・硫黄岳・楡ヶ峰等々、一二〇〇～一五〇〇メートル級の山々も多くつらなっている。とても八戸からでは岩木山は遠望も出来ない。作者も「岩木山が見える」とは言っていない。

この句は単純にみえて、なかなか手のこんだ句である。岩木山、林檎、作者は一つに結ばれなければならない、その時、「林檎剥けば」はたしかなヒントになる。おそらく作者は岩木山をよく眺めて育ち成人した人、そして嫁いだから今日まで、真紅のおいしい林檎を毎年一度も欠かさず、大きな林檎箱にいっぱい送ってくれる親がいるのである。(以下略)



風土集



神蔵器選

ひとつづのなみだ十月桜かな 福生 雨宮 桂子

紫苑咲くきのふの我に会ふごとし

肩で泣く少年独り鳥渡る

コスモスの十本ほどの笑ひごえ

仏頭のほほゑみに会ふ秋思かな

小鳥来る小学校に御成門 川崎 内藤 静

十六夜の形見に賜ふ黒茶盃

枝伐れば鴉ものいふ秋の暮

風音や酒熱くしてひとりの夜

鬼の子をあやすほどなる風が吹く

虚子庵の飛び石づたひ紫苑かな 東京 奥田 茶々

山荘の屋根は木琴木の実降る

秋日さす銀座和光に乳母車

鳥渡る赤きアーチの霧笛橋

我にある臨死体験みみず鳴く

御成通り抜けて由比まで秋の空 川崎 仙田 孝子

筆書きの虚子の選句稿薄紅葉

秋薔薇のアブダカダブラまだ蕾

馬蹄形てふ音楽ホール秋灯

便り書く文字の大小夕時雨 榎原

三代に小児科醫院金木犀 岡本 尚子

牛鳴けるくらかけ山の良夜かな

木の実降る根方に小さき道祖神

尼僧院にルルドの泉秋の薔薇

守護神は剣片手に秋気かな

深秋や日当たる畦へ足の向く 津山 生田 作

野良衣干す空明るみて秋の虹

朝寒や群れを解かざる鴉どち

蔓引けば山の近づく夕木立

拝殿の裏へ廻れば木の実落つ